

岡島弟三集

特 259

92

始



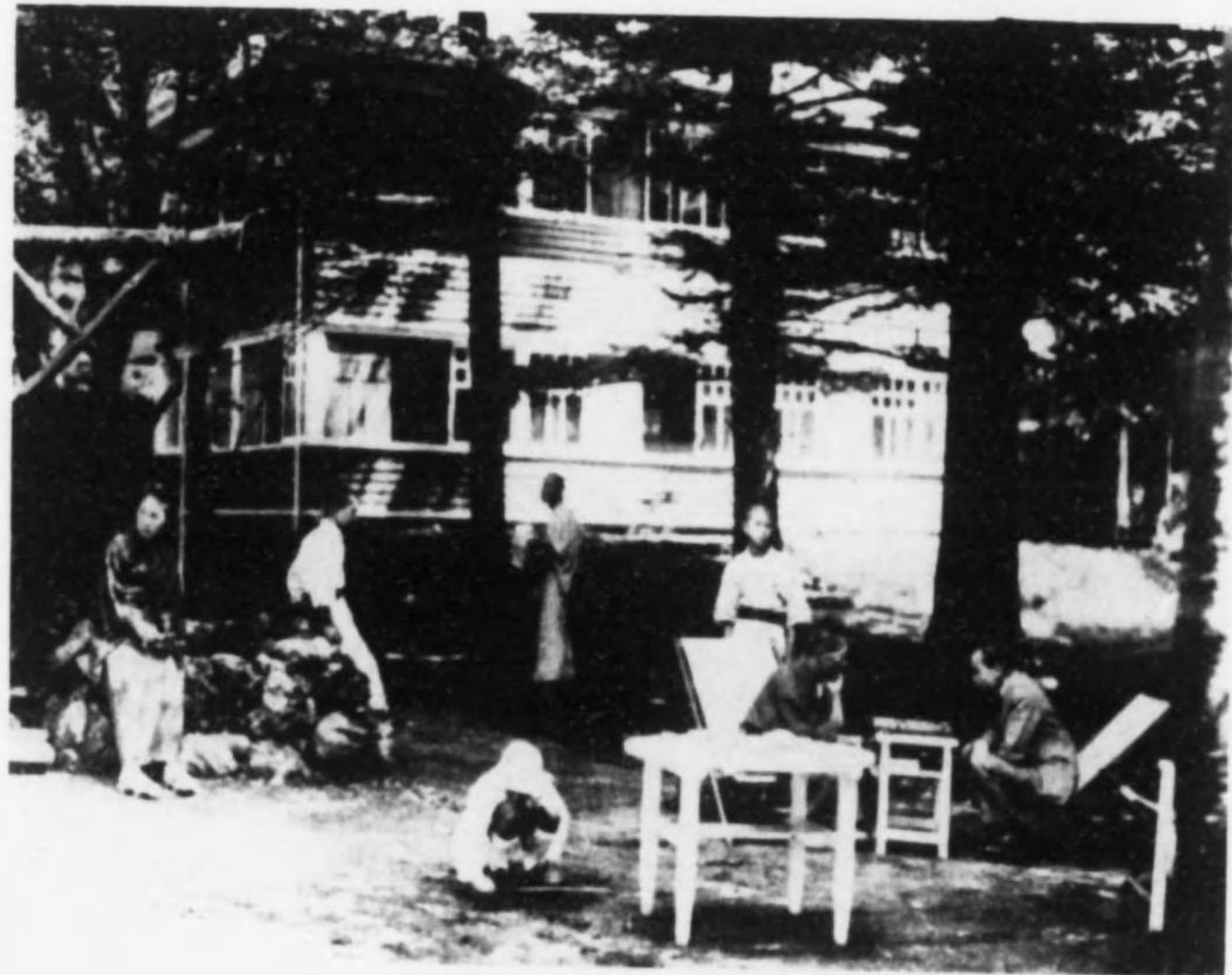
特259
92



岡島多氏集

下





臥雲山房之圖



縄うきく

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつ

あつあつ



あつ

あつ

間島弟彦集 下

由比が濱

久にしてわがふむ砂の松の徑はこみちだら日ゆらぐ
竹のほさきに

庭木戸につづく砂みち松のこみち海まづ光る
砂丘の上に

あこがれし海遠廣くかがよへり狭きに馴れし
まなこ眩まぶしも

いきづきてのぼる砂丘まなかひに春の大うみ
照りひろごれり

降りそそぐ光まぶたに心地よし手をおく砂に
こもるぬくみも

とどとどと間遠に響く波のおと春の心の長閑
けさにをり

波うちぎはまぶきが中を掠めとぶ鴉のはねの
ぬれ光るかも

うねりうねりくだくる波を飛びしさりかうべ
かしげて瞰め入る鴉

潮さるをそがひにかへる眞砂みち生垣がくり
鳴くみそさざい

○
歛の柄にこま鳥なきぬ尾をふりぬ青みそめた
る芝生のあなた

○
度ましく涙ぐましくいたましく物思ひふかし
病みこやりゐて

現身^{うつつ}を悲しむ心極まりてはろけき命に觸るる
夜半なり

いささかのゆとりもたればまがなしき運命^{さだめ}の
我をさかり吾^{わが}が見る

ふとさめて眞夜のしじまの闇の底にもひ
て見つ我が聲きくべく

ものいへばのどの奥處おくゆかすれ出づるこゑの
小ささわがとしもなく

日もすがらものいはずあれば濁り江の水沸く
ごとし心重たみ

手あつれば胸冷えぬれて眞夜中のねざめごこ
ろの重くつめたき

手の瘡のしるくも見ゆれふくだめる脈のあは
ひのうたて黄いろく

自 省

夢うつつよれつほぐれつ風の日の空と雲との
たたずまひかも

世と我のかかはりにいきて我にいきぬうつろ
心のしみじみさびし

大き澤の岸の芦間のこもり水ゆるきながれに
あぎとふ小魚

物觸れて素やきの破片かの幾ひらとならむ日ま
での此の破甕やれもたひ

かへりみる人なき棚の破甕ただに黙もたしてあり
經む月日

繩かけて隅にそと置けやれもたひうてば響き
し時もありしか

見らく眼のちから足らはずつかむらく手力か乏し
海月男か

雀
終日を縁に仰臥し雨樋あまに來遊ぶ雀なつかしみ
けり

小さくまろき頭突き出しわれ見下ろす黒き瞳
かなし屋根の雀の

雨樋ゆ葉垂れ下りゆらりゆらりゆらるるなべ
にちちとなく雀

ふくだめる子すずめつれて親雀ならぶ小枝たの
動き久しも

雑草

蹲まり草ひくわが手汗にまみれくろぐろと光
る午後の日をつよみ

芝生

ペルシヤの氈かふむにもまして軟かうしづむ足
裏のふれのよろしも

あてびとの玉のあなうらうづむべく緑清しも
芝生の氈かは

睡蓮の池

睡蓮のまろ葉かさなりつぶつぶとくろき蕾の
ぬれ光るかも

霧雨のつゆをおもたみ睡蓮のくろきつぼみは
水にひたれり

風のむた噴水落ちてきらきらとみづの波紋の
もつるる池の面

蛙

夕餉はてて欄に居凭れば白き雨斜に光り蛙な
きいづ

一大事來ぬとばかりに高啼きて蛙なきやむ眞
夜のしづけさ

孤獨の淋しさこもる汝がしらべ聞きつつをれ
ば吾もかなしき

ひたに迫るけはしきふしのややにゆるび三聲
長ひき啼きやむ蛙

やや間遠に三聲つづけてなきやみぬひえびえ
としてなやみ深しも

活けるものに對ふ心のなつかしさを親しさおぼ
え聞き入る蛙

十一年の春の頃の歌

親子三人みたりのやから二人やみ妹すこやか
にあるがうれしき

泉水に浮ぶ木の葉を熊手もてすくひつこれも
ありのすさびに

夏の歌

池の面にもりあがる葉の緑葉のかげを幽けみ
咲ける睡蓮

30と暦の眞赤き字がもえて壁のほてりに息
づまるおぼゆ

百日紅

緋房なす花めぐしもよ百日紅眞日のい照りに
息づける見ゆ

ふりそこね雲はうごかずじりじりと灼りつく
午後のさるすべりの花

潮騒うしなは軒のきにせまりてこの夜らの浅き眠を脅か
すかも

雲の層いゆき重なるしまらくを陽はかぎるへ
りわがたつ濱邊

子の病

壬戌九月初、稲田博士、道彦を診察の結果、鹽田博士を聘す。博士は、かつて學界に報告せられたる十二支腸の閉塞と斷定せられ、十三日佐藤學士を助手として腹部切開、越えて十五日、佐藤三吉博士の立合にて、第二回の手術を施さる。其後四五日間何等の効果を現はさず、幾度か絶望せしかど、二十一日に至り、完全に下部へ疏通つき、始めて愁眉をひらく。六年羸弱瀕死の軀を以て、三週間の絶食を爲し、二回の大手術を受け、九死の中に一生を獲たる事、實に奇蹟ともいふべく、神明の加護醫療看護の最善、病者の平靜なる心境、親戚故舊の深厚なる同情、相集まりてこゝに至れるものといふべし。

きらきらと敷布に落つる秋の陽を吹き和らげ
て風心地よし

眼をふたぎ吾が手を上にそとおきぬ熱にうる
める骨立てる手を

雙手^{もろて}にかかへてはこぶ素裸の瘦せさらばへる
我子のむくろ

うつつなきむくろかき抱き手術臺に運ぶ我腕
しなえ震ふも

微風にも耐へじと思ひし衰残のむくろいえ得
たり二度の手術に

鍛へられし精神ココロひるまずおとろへのつもるむ
くろに尙し宿れり

従容と亡からむ後を語る聲に力漲れりたえだ
えなれど

枕邊の父母のおもわじつと見るまなこ疲れて
やがてとざせり

やみの中に闇黒ヤミのもつるるけはひしつやがて
かぞけき光ほのみゆ

厳くしき試煉に堪へて軀ミも魂たまも甦る日の新にいし
き命

ひたふるにおそれ惶みつつしみてたたへまつ
らく奇しき神業

白水莊にて

練絹の黄光あたたかう穂薄はかすかに揺れぬ
ありなし風に

木立しげみ橋はかくれて橋のかげさやにか
べり滑川の水

山羊の子に紙食ます子の赤き頬と柿の實にて
る夕日の光

米山氏より三島芋を送らる

富士の雪とけて培ふ三島野の畑のよき芋うま
し白芋

藤瀬邸茶事

長路次の行燈の火影ほのにじみせせらぎ咽ぶ
夜のしじまに

遠くちかき銅鑼のねいろはぬばたまの夜の木
立にこもらひ流る

大正十二年二月

睡蓮の莖のゆらぎに雲のかけいささかひかり
たそがるる池

烟突に東風の荒びの乾らびおと終日さきて爐
のもとにをり

たたきても響たらはずうつろなる鈍き心を抱
きわが臥す

大正十二年三月白水荘にて

楓^{つぎ}嫩^{わか}芽^めけぶらへり見ゆくろぐろと杉のなぞへ
のきはまる處

縁に臥せば黄昏深みひえびえとがらす戸に見
る星のきらめき

見つむれば見つむるままに細り行きみにくき
骸かみがひとつのこれる

日比翁助君罹病、幽居十餘年、豆州長岡に旅せりと聞きて

よろこびて野ゆき山行け天地にあふれ漲ぎる
このうらら日を

秋の庭

舞ひ下るいきほひうけし睡蓮の葉のゆらめき
に羽ばたく鶴鶴

黄の腹を芝生に引きて鶴鴿の光り横ぎるうす
明りの庭

陽をともしみ花咲ききららずうつむきてかげを
うかべぬ睡蓮の一つ

大正十二年七月輕井澤に向ふ
青すすき葉ごとに陽ひかげ光はじ弾きをる武藏大野の眼
路のはるけさ

畑中の電柱の上に工夫をりそのすが笠の眞日
の照てりはも

輕井澤鹿島森にて

苔ふかき切株のうへに首かしげ我を見つめて
たてる駒鳥

いしたたきその尾のふれし齒し朶だの葉のゆらぎ
見て居り夕餉まつ間を

縁近く群れて來遊ぶいしたたき脚ふかぶかと
苔にしづめり

縦の老樹すくすくたてりいただきにかけてか
ぎれる嶺ねろの一線(離山)

つかれたる身を運び來て高原の杜にかそけき
鳥が音をきく

日照雨ふる森のあかるさ一面の草生のつゆの
きらめき光る

落葉松の葉かげともしみ白雨に羽ぶるひ鳴き
て枝わたる鳥

一羽まづ雲に翔りてむくの群の森をとよもす
羽音のひびき

落葉道はてなく遠しわがかげの長きをふみて
獨しゆくも

縦のうれの高きにこもる鳥のむれ音に鳴かず
ただに動くけはひす

わが肌には班ら日ふるるなつかしさを杜の奥處の
風しめらへり

この杜のさびしさにひたり我^{わが}ころなごめば
きこゆ晝の虫の音

行けば行きとまればとまり鶴^{つる}と我との浸る
杜の寂しさ

ゆびざして我に示ししその夜の星けさやかに
照る汝^{なな}が魂^{たま}かも(憶亡^{おぼ}見)

夕日^{ゆづ}かけ並木路ゆけばわが肩によりにし汝^{なな}が
體^た温^ぬおぼゆも

森の夜の闇の静けさ樹^こ間^ま透きてにほふ隣^と家の
灯^ひをなつかしむ

軽々と身にはおぼゆれ持^もたるもの皆うしなへ
る貧しさに居り

驟雨

飄々と曠野なびかし淺間おろし森の巨樹に來りせまるも

森の巨樹見る見るくらく縁板にたばしる雨脚のうちの烈しさ

雨のあしややにゆるびて樹に草に夕陽の光は華やかにちる

碓氷峠

石のせて屋根十あまりかたまれる上を流らふ峠の狭霧

乳茸

濃緑の苔の中よりにほやかにあからみ笑める
小さき乳茸

○
澄み空のすみの極みに明きくらき遠山ひだのけざやかなりや

東京大震災の報を聞きて

やすらかにあるがわびしも修羅の巷生死の海
のうめきをおもふに

かひありやなしやと聲は我にとふあるがま
にもありふる命

大正十三年三月白水莊にて

よたよたと草生滑りて清き瀬に家鳴うかべば
やがて一羽も

陽のぬくみしみ入る槻つぎの大き幹に手をふりつ
つも家鳴見て居り

川そひの岨道せばしこもらへる日かげ薄れて
水照み寂さびしも

みとりすと眞夜を布團にくるまれる妻の横顔
の老いにけるかも

軒近き眞竹のゆれの薄れかけ玻璃戸にうつる
風たつらしも

地震ゆりて犬吠えいでぬ峽の夜を犬のほえや
まずそこにもここにも

焚火

ほがらかに空はあがれど峽はいまだ霜ふかぶ
かと日光さしこず

霜しろき落葉かきあつめ焚火すと燐寸をすれ
ど燃えつかずけり

一條の煙のぼれば焚火よとおらぶこゑすも竹
やぶの遠に

凍土に下駄の齒ひびかしかけて來るどの子も
どの子もふところ手せり

風向が急にかはれば逃げなづみけぶりにむせ
びをさなきは泣く

火にかざす小さき手幾つ凍傷の痕のあからみ
いちじろきかも

枯杉葉炎々ともえほどちかき立木の枝にせま
らんとする

煙よけてあちこちめぐりかじかみし諸手かざ
すも焰の上に

もえさかるほのほに向ふ子らの瞳の耀く見つ
つ我もたのしき

竹やぶをぬけて向うの杉むらにまつはりうす
れ消えゆく煙

四月作

赤埴^ニの崖にてる陽の照をつよみ前の杉むら片
あかりすも

とまりたる小枝のゆれを池の面のかげに見て
ゐる小雀なりけり

友鳥はみなとび去りつ頬白ののこる一つが水
浴びをるも

雑談のはたととだえぬかなりやの高囀りのす
みとほる音に

枳殻のうれ陽にけぶらへり下の枝の鶇のすが
たのあらはなるかも

青木の實つばらに赤き岨道に樹ごもりて鳴く
禽の群かも

水嵩ます溪のひびきは雨の音のほかに高まり
夜はくだちたり

あらはにも鶯こづたふ眼のまへの槭かえのあかき
新芽はみつつ

李花

峽の木立暮れ静もりぬさきつづく李の花に映は
えのこる光

杉村の暗緑かみにはえて遠ひかる白き花瓣の散り
のこまかさ

五月作

筍の根方の皮のはちきれて滑ら竹肌まさをに
ひかれり

六月作

おほひかぶさる岸のたかやぶの奥暗み椿の花
の真赤なかたまり

六月九日道彦の一周年に、遺骨の一部を白水莊十三塔の下に埋む

あわただしき一年は經ぬれともすれば傷つき
やすき心のゆるび

石磴をふむわが足音後につづく嬌が足音のさ
やにきこゆれ

これやこの命の終こけ蒸せる十三塔にねむる
子の魂たま

木下利玄君に剪花を贈りしに、歌を寄せらる。曰く「鮮らしきばらの
剪花朝園の鉄の音をさく心地する」

あさ園を鉄ならしてわがあゆむばらの香にし
む心いだきて

朝園は花の香深しやめる身のやめる友おもひ
かたむく心

月見草

夢ひらけ花瓣ほぐれて花となるそのたまゆら
の幽かなる音

○
木下行けば俄に音あり朴の葉の葉摺り枝すり
地に落ち来る

啼きすてて森にかくれしひよの聲ただよひの
こるゆふべの空に

人さはにをれどさびしゑ嬌あらで我家さびし
と言にはいはね

若き日の矜うすれてともすればかへりみられ
ぬ心のうつろ

大正十四年夏輕井澤臥雲山房にて

刈草を陽のやくにほひす石の上に鎌はおかれ
て人の見えなく

蹠裏うらにかろき弾力あり樹下道縦の朽葉のしめ
りふくみて

このあさけ森にこもらへる光ありいたや楓は
ほのあからみつ

窓によれば狭霧なづさふゆらゆらに狭霧が中
を落葉まひ來も

○
蒼穹に翳しいづる枝、枝の上に斧ふる漢子おほ
にゆれつつ

高き枝に身をよせにつつ斧ふるふをのこゆれ
をり空の眞澄に

自^しが重みに枝は撓^しむも高き枝の撓^しむがままに
斧ふるをのこ

霧の中に鴉をらびぬ一羽ならむ羽音かそけく
谷に落ちゆく

わがしはぶき遙けき谷にこだますも霧の深海
ひそかなるかも

浅間嶺の煙たなびき八千くさの大野に曳ける
黒く長きかけ

浅間平かこむ山脈遠低し空のまほらの澄みの
はるけさ



すくすくと縦の老樹の群立のかげをひそけみ
あふるる清水

つづけざまに鯉はねあがり池のもの水照らす
れて夕さりにけり

味爽の森の深處のひそかなり面おもてにふるる縦の
やにの香

あかときの寢覺を寒みさ夜床にすそかき合せ
ねがへりにけり

河合省齋翁の鎌倉吟行に題す。震災後初春鎌倉作

崩崖能上乃倒連樹爾万慈留梅濃花華乏志良仁
此春乎咲久

大正十五年秋輕井澤臥雲山房にて

百尺の縦の群立しづかなり梢にふれて星また
たけり

群立の縦の大木のひそやかにまたまたまにし
て鳥の羽ばたき

岩窪の苔の清水に鶴鴿の羽ばたき浴む幽けき
そのおと

禽の巢

小さき頭三つ四つ動く高き枝の巢ごもり雛は
親求むらし

えだ渡りしづかに巢による親禽の頭かたむけ
窺ふまなざし

雛の群嘴をひろげて親禽を迎ふる見ゆれ聲は
きこえず

餌をはこび今や巢を立つ親どりの更に隈なく
覘くけはひす

黄なる嘴大きくあけて雛の群燥ぐとすれど啼
く術は知らに

羽搏けど立つすべをなみ巢のへりに頭もたげ
て餌を待つひな鳥

荒川光子嬢を悼む

大樹の根の苔生を踏みし白き靴まさ目に見え
てかなしき光子

とき色の薄絹の裳の影薫し池のみぎはに立ち
し光子は

臥雲山房を出でたつとて

來む年も二たび觸れむ門の戸か心にいひて病
める身おもふ

門を出づと噴井の水のうまし水兩掌にうけて
飲み足らひたれ

白水莊にかへりて

樹々のすがた千草の色のしたしもよ笑かたま
けて我に向へり

共に棲みし三十年まりを吾爲に全くささげし
我が孀あはれ

病める身はくるしと思はずみとりする妹が心
のさびしさおもふ

十三塔亡見碑

あちららぎに陽かけかそけし逝きし者ゆきて三
年を我老いにけり

○
遠天の光よこぎる鳥のかげ我ゐる峽はすでに
闇なり

我にのみ昏るる日ならず然れども寒く重たき
今日のたそがれ

あまりにもかひなき命かきいだくこれの軀は
いゆもいえずも

垂りを低みこの竹やぶの茂り葉の間なくしゆ
るる揺の重たさ

誨ふべき我にはあらね今日もまた人にをしへ
て心さびしき

雑草の朽葉しをるる断崖によどむ日光は春な
らむとす

ラサオにて大罪儀を遊拜す

牀の上に畏こみ伏して御輜車の哀しきさしり
をろがみにけり

李花

咲き定まり散らむともせぬ山かげの李の花に
たゆたふ夕日

夕日かげまともにうけて咲きををる李の花は
静もれりけり

○

長き冬を軒に眠りてかたつむり動くともせず
春さりにけり

昭和二年五月

尾根の鴉朗らに鳴きてひそまれる峽の八十隈
笈せりけり

洋本の紙の香あましうつとりとばらの若葉の
陰に臥し居り

いぶせみて目をとぢ居ればそと入りつ出で行
くけはひ嬌にかあるらし

髓にかもひそむ疲か物みると臉あぐればまぶ
た重たき

床にたてば膝節よわし長病ながびの身のおとろへを
驚きにけり

昇かきて行くわが家やの者に禮れいのべてつつましく
我をかへりみにけり

慣れて乗る椅子心地よし昇かく人に禮れいいふ事を
今日は忘れつ

つながれておもひかくべき事をなみ茜雲浮く
空を見て居り

○
緑より緑にわたす瑠璃いろの空のまほらを仰
ぎ臥す我は

眞白鳩山のみどりを翔る見ゆ尾根うちこえて
空に小さく

萌黄葉の柿の若葉のそがひにしこもり黒ずむ
槻ツキの青葉は

光ひ有つ雲の下びを飛ぶ禽の影見失はず山の端
を遠み

病む者は病みてをあらむすこやけき孀が旦暮
つつみなくこそ

ものいはむ親しさもちてあした見やる我に迫
り來樹々の緑は

一莖の草のなびきもこころひく親しさに居り
谷戸の庵住

樹の下臥仰ぐ青葉にこがらめの小さき眼光る
そこにもここにも

避け得ざる戦ならば戦はな強く正しくますら
をさびて(人に、二首)

戦を避けてさけ得む此世かは正しく生きて強
く戦へ

ひなげしのゆるるおもしろいつ迄もゆるる見
てをり手調子とりて

葉ごもりに動く影あり餌をもらふ時をたがへ
ずつどひく雀

地に下りし雀三つ四つこちら向く顔の柔毛を
風に吹かせて

樹下蔭ひそまり咲ける石楠花のうすくれなる
の放つ明るさ

夕かげり李のはなはいよいよ白しこの花のもつ
淨きさぶしみ

澄みさゆる李の花の純ま白しろ花みつつをあれば心
さびしも

蹲か踞はに一葉散り置く柿もみぢてり映はえにつつ
たそがるる庭

紀州橋本より陀羅尼寺を白水莊に移す

大棟木梁木あらはに陀羅尼寺の御堂の屋形木
がくれにそびゆ

陀羅尼寺の屋根のなだりの反さかを打ち山の杉村
劃りたらずや

芽ぶき遅き槐樹の幹のうねりしるし山の傾斜かた
の緑の中に

樹の下の椅子に安臥し吾が對ふ山のみどりの
遠く廣しも

動き幹あらはに見せて檜林もえぎ嫩葉の淡き
烟らひ

風薫る李若葉の樹下かげ静かにふして心長閑
けし

甦へる大天地の五月ばれ現身うつしみ吾われは病まむも病まずも

米山駿二氏の一周忌に

いにし子のあとのうつろはうつろにてかへり
來し日の今日さみだるる

○
おのれ一人直しと思もひてふるまひし稚わき我わよ
我は老おいたり

陀羅尼寺の工ら去りて一時は峽の青葉の一葉
動かうかず

高く低く青葉に浮ぶ陀羅尼寺の御堂の屋根の
反のしづけさ

摘みし李布して拭けば艶々に光そひ來くも紅玉
のごと

昇かかれ来てこれの御堂に御佛の慈顔をろがむ
病人やまう我は

御佛は結跏趺坐します真うしろに白壁ほのに
淡し御影おん

地に墜つる李の音にうたたねのさめて又よむ
同じ處を

やめる身のかくれ居どころ死なばわが骨を埋
めむ峽の杉村

いささかのこの自由さへ殺がるべき時をし思
へば尊し今日の日

谷戸やの盆地杉の樹かけを美しく淨らに保ち寂
しく住まむ

豊満の命にあきし萬木の緑くろずみ秋さりに
けり

荒木づくり水に臨める小亭の簷をつらぬき杉
の幹立つ

御佛の前に安居し合掌す下凡の心まどひふか
しも

たまきはる命のかぎり在りへなむ峽の杉むら
我によろしき

天の恵あがめ悦べかよわき身迫る病苦に耐へ
ざらむとす

我よりも苦しき人は多くあらむ耐へがたしと
ふは男兒をのこにあらじ

生くべきおひめを負ひて我は生く長き病苦も
忍ばねばならず

手をとりにてわれ慰むるふるき友よあふるる涙
我にとがむな

年を経て病みさらばへる現うつし身に慈悲圓滿の心
みたしめ

何か食べて見たしと思ふかそかなる心うれし
み夕餉に向ふ

杜を透く強き日ひ射ぎに白菊のむらがりはゆる夕
かけの庭

今一步いま一步我を高く淨くなさましと願ふ
病苦の中に

静かに我をかへりみて今日はあらむ雲低く垂
れて病ひまあり

片山廣子夫人より歌三首をよせらる。返し

病苦とあらがひにつつ寂かなる心求むと夕日
にむかふ

眞清水の噴く音閑けき山の家の戸を守りてあ
らむち小さき赤腹

しみじみともろさを思ふ現身に微けき命たへ
がてぬかも

○
落葉たく烟のほひながれよる窓の日かげも
したしまれつつ

夜も晝もふし居の床にやうやくに瘠膝まげて
かいなでにけり

今のわれをこの苦しびゆ救はしめ生死の道は
とにもかくにも

天のめぐみ人のなさは病み臥ふるわが現ま身を
ひたしめぐるも

何事も唯ありがたしたふとしとへりくだる心
のどけかりけり

月日はいつか流れて、去年弟彦がみまかりました日も近づいてまゐりました。

その日を思ひ、また故人を永く偲びたいと思ひますので、病んで七年、永いたづきの間にもあけてくれ心をやり、なぐさめとしました歌の詠草を、佐佐木先生にお選びいただいて、遺稿に編みましたものを、生前お知らせいただいてゐた方々に、さしあぐる事にいたしました。若い時から好きなお道とて、折にふれて詠み出されたものが、貳千首以上もありましたが、ここに其うちの五百首を、おほよそ年代順に載せて、あとは又の折にとのこしました。

去年の秋、萩の花の散り亂れる風のあした、虫の音の細りゆく

雨の夜などに、遺稿の歌を寫しうつしえつつ、心にうかびました言の葉は、

秋の夜のなみだぐましさ亡き人の歌うつす手のはこびによしも

わすれむと思ふ吾子をも思ひ出でつこのこしし君が歌よみをれば

この集の上巻の初めにのせました肖像は、白瀧幾之助氏の筆。次なる白水莊の圖は、藤原草丘先生の筆。色紙の歌と、短冊の夕かげりは、鎌倉の作。陽を負へるは、輕井澤の作。山水の圖も、同じく彼處での筆で、畫の號は圭魚といひました。下巻のはじめ

のは、臥雲山房の樅の老樹の蔭で、藤原先生と將基をさしてをる
寫眞。次なる二葉は、自畫讚であります。
なほこの集をまとめますに就いて、米山梅吉氏、その他の方々
に、一方ならぬ御骨折をいただきましたことを、深く御禮申上げ
ます。

昭和四年二月

間 島 愛

色紙の歌 もえいつる山のなだりの新みどりまむかひたてる我のか

そけさ

短冊の歌 夕かげりは下巻七一頁に

同 陽を負へる夕晴淺間山はだにふとき紫紺のひだをたため

り

畫讚の歌 繩かけては下巻九頁に

同 鳴きかはし目白とびさりし垂り枝の柿の實の赤のいよい

よ赤き

昭和四年三月十四日印刷
昭和四年三月二十一日發行

編輯者 神奈川縣鎌倉町小町
間島愛

印刷者 東京市京橋區宗十郎町十五番地
小林國泰

印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地
會社 東京國文社

終

